



環境教育学会 関西支部通信

第10号

関西 ECOMAIL

環境教育学会関西支部から関西の会員の皆様に、ワークショップのお知らせと関西の環境教育に関わる情報交換をしていただくために発行しています。

また学会員外の方々に環境教育に関心を持っておられる方や実践をされている方のコミュニケーションも広く図りたいと思います。

1000円の通信費（1年分）をいただきましたら、ワークショップの案内葉書と ECOMAILを送らせていただきます。

（通信費振込先……郵便局「大阪 9-37886」環境教育学会関西支部）

関西ワークショップのお知らせ

連絡先：大阪教育大学環境科学教育研究室 (☎ 06-771-8131 内線 417)

第15回 1月25日(土) 1:00 pm ~ 4:30 pm

環境教育シンポジウム 「環境と余暇を考える」

環境学習で豊かな余暇ライフを！ 土曜日は塾、それとも原っぱで遊ぶ？

会場：大阪府立文化情報センター (詳細は次のページを御覧下さい)

第16回 2月22日(土) 2:30 pm ~ 5:00 pm

話題提供 本庄 眞さん (奈良県東稜原小学校)

「楽しい自然環境学習」

会場：大阪教育大学(天王寺)第12教室(1階)

(JR環状線寺田町駅下車 西へ徒歩3分、または天王寺駅下車 北東へ徒歩7分)

第17回 3月28日(土) (テーマなど、詳細は追ってお知らせします)

環境教育—講演とシンポジウムのお知らせ

主催：日本環境教育学会関西支部、大阪府立文化情報センター
後援：大阪市、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会
協賛：財団法人日本余暇文化振興会



テーマ：「環境教育から余暇教育を考える」

日時： 1992年1月25日（土） 12時30分より受付

場所： 大阪府立文化情報センター

大阪市北区中之島3-2-18 住友中之島ビル5階 (☎ 06-444-1011)

(地下鉄四ツ橋線「肥後橋」下車 徒歩5分 朝日新聞社ビル西隣)

内容： 13:10 スライド映写 「ラベンダー自然公園（ロンドン）の子どもたち」

解説 大阪府立大学講師 重松敏則氏

13:40 あいさつと講師紹介

日本環境教育学会関西支部世話人代表 赤尾整志

13:45 基調講演 「余暇教育とは何か」

講師 宇都宮大学生涯学習教育研究センター助教授

元・文部省生涯学習局社会教育官 瀬沼克彰氏

15:10 パネル・ディスカッション 「環境教育から余暇教育を考える」

コーディネーター 大阪教育大学教授 鈴木善次氏

パネリスト 甲南大学文学部助教授 谷口文章氏

奈良文化女子短期大学講師 榎村久子氏

大阪YMCA主事 上村賢氏

参加費：500円（資料代等）

定員：150名（先着順）

申し込み：環境教育学会会員および関西ECOMAIL購読会員は

関西支部事務局（☎ 06-771-8131 [内線 417]）まで電話か往復はがきで、
一般の参加ご希望の方は下記まで往復はがきで、それぞれお申し込み下さい。

〒541 大阪市中央区瓦町4-3-14 御堂アーバンライフ1002

グローバル環境文化研究所 「環境教育シンポジウム係」

公害教育や自然保護教育からスタートしました環境教育は、経済の成熟によって社会構造が急変しつつあります今日、新しい視座からの検討に迫られています。わが国では1980年代に入って、生涯教育が新時代の教育の基本理念として打ち出され、現在は生涯学習時代と言われています。なかでも余暇学習や余暇教育は、これから環境教育を進めていくためには大切な問題であると考えられますが、「余暇」と真剣に取り組むことは、日本人のはじめての経験であるために、まだきわめて不透明な現状です。この講演とシンポジウムによって、少しでもこの問題について理解を深め、今後の支部活動のガイドラインの一つに加えることができましたら幸いです。（環境教育シンポジウム実行委員会）

第11回ワークショップ（1991.10.19）報告

「ゴミを考える」

大阪キリスト教短大・日下 和信

《ゴミは処分費用の安いところに集まる》

環境を守るためには、ゴミの不法投棄や路上への置き去りなどを防ぐことが大事である。そのことは冷静に考えれば、自明のことであるわけだが、不用物やゴミの処理行動の基準を「単純に、お金が掛からないこと」に置くとするならば、ゴミの処理費用がタダか、安いところに集まってくるのは、種、自然な成り行きである。

その点で、大阪市のゴミ処理に関して「単純かつ大問題がある」。通常、家庭などから出るゴミ（一般廃棄物）の処理費用は、概ね、1トン1万円になる。しかるに、大阪市の環境事業局が、最終処分費用も含んで、1トン3900円の格安の費用で「業者から処理を引き受けている」のである。その中でも、特定の業者に対しては、“さらに9割減免措置”を講じて、実質1トン390円という信じられない価格で、ゴミの処分を引き受けているのである。1トン当たりの処理費は、1万円掛かるのは必然で、その差額は「税金で賄われている」ことになるのである。

この大阪市の格安のゴミ処分の引受の結果、近隣の市町村のゴミの流通事情に大きな影響を与えているのである。「安いところに集まる」法則から、実質的に大阪市の焼却炉に向かって、近隣のゴミは吸い寄せられるように集まってくるのである。本来なら大阪市に処理責任の無い分のゴミまで、大阪市が処理しているのである。

このことに加えて、大阪市の焼却炉がゴミ・コストを引き下げているために、本来、リサイクルに回されて良いものまで、焼却炉に放り込まれる事態になってきているのである。もう、完全に悪循環に成っているのである。リサイクルを維持するには、最低限“人件費”が出てくるような、静脈産業の基盤が確保される必要があるわけだが、その状況までも押し潰してしまっているのである。“大阪市が適正な処理費用によるゴミ処理”を一刻も早く実施しないと、環境問題の重要な一角が崩れたままになり、本来、対策が施せることまで、「手の打ちようの無い状況」で放置され続けることになる。



環境ワークショップの話題提供者（報告をお願いできる方）を募集しております。また、どのようなテーマでのワークショップ開催が望ましいか、あるいは講演以外にどのような形式のワークショップ開催が望ましいかなど、関西ワークショップに対するご希望なども、関西支部事務局までお寄せ下さい。

ECOLO人

自然との触れ合い

榊形公也 (大阪教育大学助教授)

鈴木先生がおっしゃるには、小生、一銭の儲けにもならず、かえって持ち出しの多い変な趣味を持っている人間として、この欄に登場させるのにふさわしいとお考えになったようです。小生のエコロ人としての資格は、お金と時間ばかり食う畑仕事を趣味にしているということでしょう。

戦後間もない頃、公害の町としてすっかり有名になってしまった神奈川県の川崎に生まれました。多分食糧難ということでしょうが、山形の農家出身であった父は仕事とは別に、家の近くで田を耕し、鶏なども相当数飼っていました。趣味としてではなく、生活のために、春には母や、祖母に連れられて田芹やわらび、よもぎ、のびるなどの野草を採ってきてはおかずにし、秋には兄や父に連れられて柴栗とか山芋などを採りにいきました(川崎といっても内陸部は武蔵野の端にあたり、当時は小高い丘陵が続く、どこまでも雑木林という景観でした)。先日父が亡くなりましたが、父に連れられて、山にいったりは木に登らされて、どこに栗やあけびがなっているかを見つけるよう指示されたり、銀杏や鬼胡桃がどういうものであるかを教えられたことが、今でも鮮明に脳裏に残っています。

この様な生活体験が習い癖となって、春や秋にはどんなに忙しくても山野草などを採りにいきますし、篠山にまで土地を借りて畑をするようになってしまいました。学生時代でも、京都の北白川の山の中で、こっそりと開墾して、野菜を作ったり、山に生えている渋柿で干柿などをつくっていました。そして、このような趣味から実に多くの人との触れ合いが可能となっています。

専門の学問は倫理学ですので、最近の様々な環境問題に対しても、環境倫理的なアプローチをしなければと考えています。自然に対するこれまでの無反省な態度に対して、自分の生き方をも含んだかたちで、倫理的な反省を加えたいと思っています。

自然に対する私の態度は小さい頃の体験に裏打ちされており、それによって方向付けられています。他の人はまた違った形で、自然への触れ合い方を身につけていることと思います。それを思えば、小さいときから肌で知ることのできる環境教育がなされるべきだと思います。

似顔絵は食の比較思想の授業に出席し、篠山での収穫祭などに参加してくれた学生の描いたものです。



KINYA - KUN

ますがた きんや 先生

有機農業を実践しながら、学生たちに環境保全の大切さを哲学・倫理学の立場から教えておられる大阪教育大学のユニークな先生です。

ECOLO人インタビュー：今回からインタビュー版も始めます。どうぞよろしく。

山本忍先生に聞く！ 生活科の環境教育

聞き手：本日はお忙しいところ、有難うございます。生活科の環境教育で一番大切だと思われることは何でしょうか。



山本忍先生 (56才)
 寝屋川市立木屋小学校校長
 寝屋川市小学校
 生活科研究会会長

山本先生：生活科と言っても、まだ始まったばかりで、何をと具体的に言ってもなかなか

難しいですよ。具体的な活動や体験を通じて、自立の基礎づくりをするために、自分と自然の関わり、自然と社会の関わり、自分自身を見つめることを柱として、子供たちを見ていかねばならないでしょう。しかし、それらの捉え方についても人によってまちまちで、これといったまとまりが未だ現場にはできていないのが現状です。だから、具体的な子供たちとの毎日の関わりの授業を通して、みんなで考えていこうとしています。またその中で、社会や理科との関わりなんかも見つけていきたいと思っているんです。

聞き手：確かにそうですね。新しい教科ですので、一からやっついていかないと。

山本先生：生活科の教科書はもうすでにできていますし、先生方は授業をなさっていかれるでしょう。しかし生活科のねらいをしっかりと理解してもらっていないと、ただ社会と理科が一緒になったものだということになりかねません。また、知識中心の詰め込み教育になってしまう危険もあります。生活科が生まれてきた経過をよく踏まえて、具体的な体験からの活動を通じて気づいたり、見つけたり、協力したり、あるいは表現したり、自分自身を見つめたりすることを大切にしてほしいのです。今までの教育は、頭だけで知識を得たり、その子の概念や知識をつくってきたところがあると思うんですが、この生活科の教育や論議を通じて、それを見直していったほうがいいとも思っているんです。今の小学校の教育を改革し、地についたものにしていったほしいんです。

聞き手：確かに小学校だけでなく、中学校の教育が高校受験を抱えていることも、いろいろ社会的に論議されていることですし。

山本先生：だから、今の教育は自然と触れてものを育てたり、作ったり、遊んだり、気づいたりして知識を身につけていくのではないでしょ。本からとか、教えてもらったりということですからね。自分の具体的な行動や活動を通じて考えたり、考え直したりしてくれることを生活科では願っているわけです。だから、今までの理科の中で観察を大切にしてきたことや社会科の中で具体的活動を大切にしてきたことから、基本的にはそれほど変わっていません。戦後教育の中のコア・カリキュラムや経験主義的なものを大切にし実践なさってきた方々は、生活科的な授業はたくさんなさっていたんですよ。でも今の時代、少なくなっているのも事実です。子供たちを取り巻く社会的状況が、自然と触れ合う経験・体験の機会の少ないものになってきていることも忘れてはいけません。それに評価の問題もあります。子供が受け身ではなく、どれだけその子自身が自分で興

味や関心を持って活動してくれたかを見ていかないといけません。これはどの教科にも言えることですが、難しいことでもあります。テストでは出てきませんから。しかし逆に言えば、難しいからどうしてもやっていくことが必要です。

聞き手：今までの教育のあり方を見直し、ある意味で新しい発想で教育活動を見直していくということになるのでしょうか。ここで、環境教育との関わりについてなんですが、環境教育と言いますと、地球規模の問題であるとか、日本列島の中でとか、地球の自然の成り立ちを知るとかよく言われますね。

山本先生：そういう知識面も大切ですが、心で感じていく、体験していくということの方が大切でしょう。私は生活科は環境教育そのものだと言ってもいいと思うぐらいです。自然と関わっていくことが中心と思います。一人一人の子供が個として自然と関わっていくんです。教室の外に出て、公園や道を歩いてみて、秋を見つけよう、秋を探そうということになり、虫や木の葉、あるいは草花、風、日光の中に見つけていきます。まづ秋を親しもうということにもなり、これらのことは今までの教育にはなかったことと言えます。葉を拾って遊ぶ、例えば、服をつくったり、飾りをつくったりするんです。ドングリを拾えば、それでいろいろなおもちゃを作って遊んだりもします。虫がいても、葉の裏にいればそこが家になるわけで、それを取ってきて一緒に遊んだり、それを育ててまた自然に帰してやる。このように知識を得るよりも、自然をいたわる、自然に親しむ気持ちを育てていってほしいと思うんです。それこそ地球に優しくということになるのでしょうか。自然の本来の姿を知り、それと私たちの生活との関わりを知ることも、生活科のねらいですからね。それは環境教育そのものでしょ。生活科というのは自然との関わりを中心にしているものが多いんですよ。

聞き手：自然の中の命を知り、自分の命を知る。自然の形成者としての自覚を育てる元を創っていくということにもなっていくのでしょうか。

山本先生：人間と自然との関わりの中の心情が軽視されてきたことはあるでしょう。だから木の葉と遊んだり、虫と一緒に過ごしたり、また兎でも、兎がどんな性質や特性を持っているのかを知るよりも、兎と遊ぼう、育てよう、飼おうというように、今までの教科以前のものを大切にしていこうとしています。ある意味では幼稚園でやっておられような総合的な活動と共通しています。そこに幼稚園・小学校の関連性、つながりがおられることもあるでしょう。ですから自然や社会の中にまず入っていこうとしている。それが生活科が一番ねらっているものではないでしょうか。活動を通じてというのはそういうことではないでしょうか。

聞き手：人間の一番奥深いところから、自然を感じ、親しめる人間づくりということになるのでしょうか。

山本先生：日本人だけではなく、日本人の昔の生活を見ると、例えば山を信仰の対象としていたことが数多くあったでしょ。また、山の木を切るとたたりがあるとか言われて、山の自然の中に変な人間の力が入ってくるのを防いでいました。これには、もちろん宗教的な意味あいも多分にあったわけですが、よく考えればそれ以上に自然と人間との付き合い方そのもの、自然を守り私たちの生活を守っていこうとした生活の中から生まれた知恵のようなものが存在したのではないでしょうか。ですから、自然や社会との自分という人間との関わり方を学んでいくことが生活科の中では、大切にされていくべきだと思います。

います。つまり、環境教育の中で、環境を守っていきこう、育てていきこうとしていることを、この生活科でもねらっているんですよ。また環境教育においても、自然がどれくらい破壊され現状がどうなっているかといった知識ではなくて、自然を愛し慈しむこと、自然と私たち人間が共に生きる、共存していくことがこれから大切にされていくのですが、生活科でも同じことを考えています。そう考えてみますと、環境教育と生活科は同じものであるということが言えてくるんですよ。私は、生活科によって、教師を変え、子供を変え、教育を変えて、今の知識偏重になっている教育が改革されることを心から願っています。だから、生活科にほんとに惚れているんですよ。教師みんなが生活科でねらっていることを理解してやっていかないと、生活科はつぶれてしまいます。ダメになってしまいます。何のために生まれてきたのか意味をなさなくなってしまうんですよ。だから、本当に、私たち現場の教師は真摯に取り組んでいかないといけないと思っています。

聞き手：今日は本当に有難うございました。生活科最前線におられる先生の含蓄あるお話へ伺い、先生の生活科に賭けておられる情熱に何か身の引きしまる、しかし心温まるものを感じました。今後、ますますのご活躍をお祈りしております。

(環境教育を学校教育の中で具体的にどう位置づけていくかは、これからどうしても考えていかねばならない問題であると以前から思っていました。生活科がある意味で先駆的な役割を果たしてくれる教科であることが、先生の熱情いっぱいのお話からよく分かりました。他の教科にこれからどのような形で影響を与えていくのか、小学校の現場での教師の役割がとても大切であることを実感として感じました。聞き手：北村直也)



大阪府下 環境保全団体調査協力のお願い

大阪府では、府民による環境保全活動の活性化に資することを目的とした、府域における環境保全活動に取り組む民間団体の活動状況の調査を行っています。調査は「環境保全団体調査研究会」(会長：鈴木善次 大阪教育大学教授)に委託しておりますので、大阪府下において環境保全活動を行っている団体(グループ)をご存知の方は下記までご連絡いただければ幸いです。(大阪府環境保健部環境局 播本裕典)

連絡先：大阪教育大学 環境科学教育研究室

〒543 大阪市天王寺区南河堀町4-88

☎06-771-8131 (内線417)

ネット・ワーク



フロンター

(1) 「六甲 山の企画人 僕らがつくる、山の地方型：第3回環境共有ワークショップ」

2月9日～11日(日、祝、火) 二泊三日 場所：大阪YMCA六甲研修センター

高校生以上 定員40名 参加費：23,000円

主催：聖マーガレット生涯学習研究所、大阪YMCA

従来の価値観や思考方法で考えれば、少々八方ふさがりの人と環境とのかかわり。

今回はホンモノの創造しい人にそそのかされて、Think Globally, Act Locally,

Be Personally の視点で、自然と人とのいい関係を提案する企画づくりに挑戦。地球

と仲良くする方法を考えること、それが僕らにとってのエコロジーかもしれない。

問い合わせ先：大阪YMCA六甲研修センター(瀬川) ☎ 078-891-0050, FAX -0054

(2) 「つくしんぼグループ展『The Sense of Wonder』(環境をテーマとした作品展)

出品日時：2月13日～18日 場所：画廊さぶ(大阪市北区茶屋町) 入場無料

友情出品：姉崎一馬氏、森本二太郎氏

「つくしんぼ」は共に自然を感じ、共に自然と遊ぶ仲間たちです。

今回は、それぞれの思いをそれぞれの形で表現することに挑戦。

皆のいろんな「センス・オブ・ワンダー」、是非ご覧下さい。

問い合わせ先：神尾はじめ(☎ 06-623-7998)、円満堂修治(☎ 0797-22-8792)

(3) 「大阪ネイチャー・ゲーム初級指導員養成講座」(ネイチャー・ゲーム自然体験講座)

3月20日～22日(祝、土、日) 二泊三日 定員50名(大人)

場所：大阪府総合青少年野外活動センター(大阪府能勢郡宿根)

受講料：18,000円 宿泊、食事代：4,620円

主催：大阪ネイチャー・ゲーム初級指導員養成講座実行委員会

共催：グローバル環境文化研究所、ネイチャー・ゲーム研究所

問い合わせ先：大阪府総合青少年野外活動センター(木内) ☎ 0727-34-0500



★ 関西ECOMAILへの投稿を募集しています。

★ また、ネットワーク欄への情報提供もよろしくお願い致します。

関西ECOMAIL 第10号 1992年12月25日発行

通信費 一年 1000円

編集 日本環境教育学会関西支部世話人会

発行 日本環境教育学会関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室 (鈴木善次研究室)

〒543 大阪市天王寺区南河堀町 4-88 (☎ 06-771-8131 [内線 417])

次回 第11号 1992年2月1日発行予定 原稿締め切り 92年1月20日